

京鹿子

平假名でつづる京鹿子
非平假名でつづる京鹿子

9月号

故 豊 田 都 峰
叡 林 集 その九



油 座 を 統 べ し 宮 居 や 薰 風 裡
五 月 晴 従 是 撰 津 の 水 風 景
聖 天 を 下 る や 涼 風 ま と も に す
月 見 草 夕 潮 騒 に 応 へ 揺 る
夕 星 を 空 に を さ め て 涼 し と す
星 涼 し 流 木 の 座 を 借 り も し て

夕風やわがこころ根でありにけり
山莊へ曲がれば月見草迎ふ
滴りに打たれ上手な草ひとつ
下り来てからまつ林に汲む泉
ががんぼよ向かう岸までおれもゆく
川風に来てゐる床几や葛桜
青嵐丹波幾重の起伏なる
分水嶺下りてよりの草いきれ



— 近 詠 —

鈴鹿 仁

夏の動物園

百獣の王のあくびに西日消ゆ
日盛の影をゆるさず象一頭
晩夏なる一こゑ叫ぶ猿の園
— 追懐 — (その十三)
一杓の打水にある板修業
かりがねや渡る世間に三^{さん}上^{じょう}戸^と



— 近 詠 —

和田 照海

夜光虫

夜光虫引き波に燃ゆ野風岬

安芸伊予の風のまんじや花みかん

脱藩のここより茅花流しかな

通信使の螺鈿の文箱青葉騷

ひじき干す蒲刈番所石畳



神麓集

雲の峰 藤岡紫水
皮を脱ぐ竹に凜たる志
七変化愛憎すでに遠のきぬ
紫陽花や月に仄めく夜の翳り
水張れば山の逆立つ千枚田
光背は白き峯雲露座佛

余韻 松本鷹根

菟切や無言に京を去る流れ
裸婦像に「響」の名あり合歡の花
冷索麵 対岸淡く暮れ泥む
突き抜けて戦ぐ若竹雨あがる
万緑の鐘の余韻に手を合はす

松田都青

女所帯の隣りのダリア燃え過ぎる
麦は黄に土になるまで男かな
あの人の一語のために更衣
追ひつけぬ距離に父母居て八十八夜
うす衣は洗へば消ゆる愛で染め

夏ごろも 北川孝子
再会の握手は両手夏帽子
半身を蔵書に埋めて夏ごろも
夏帽子空の色なる一会かな
一笑のあとの瞑想草笛野
夏帽子吹かれ詩想のはてしなく

踏絵 丸井巴水

流鏝馬の的真つ二つ午後は晴れ
後ろより目隠しされて香る薔薇
蜘蛛が来て一文字隠す夜の深さ
班猫のいつしか消えて父母の墓
窓若葉踏絵に触れぬ土踏まず

浄雲 塩貝朱千

ふる里は遠し茅花の眩しき日
浄雲を幾重にかさね合歡の花
返事なき会話つづけて青き夜
別れ来て青水無月の夕日黄に
青々と桔梗を活けて恋しかり



京鹿子集

豊田都峰選

かきつばた風の濃くなる書院窓

城陽 鷺山 珀眉

吊りて干す千の墨の香風五月

水門の水あと著き早苗月

薫風にたしかめ鳴らす魔除鈴

利き酒のやうに新茶を嗜みて

子の取り柄一つ見つけて水馬

アリゾナ 伊吹 之博

樟若葉ただひとすぢを押し進む

杜若一期一会に見頃かな

代掻げば白雲走る棚田かな

福山 石原 孝人

幸せの扉探して夏ツバメ

青空や風の形にしやぼん玉

葛餅や聚楽壁の茶室にて

山若葉。パレットに溶く風の色

広き庭黄色のたんぽぽ芝の敵

オハイオ 水谷 直子

八重桜風まだ固き山の寺

一日でたんぽぽ変身風にのり

擦り切れし夏座布団や尉を彫る

京都 津野 洋子

たんぽぽの顔だけ摘めば種とばず

工房の広さ三畳花蘇枋

腰かがめたんぽぽ退治年想ふ

リラ冷えと一ト言添へてあなかしこ 札 幌 野村 鞆枝

菖蒲の葉紙面はみ出す絵手紙来

自在鉤手もち不沙汰の夏炬かな

田仕事の手筈とゝのひ若葉風

五月晴れ山ふところで阿蘇のぞむ

回向柱ふれて望みや遅桜

牛にひかれ詣でる春の回向柱

七年目牛にひかれて秋の温泉

朝の園独り体操風薫る

五月雨や朱印帳胸に礎上る

齋王代威風堂々夏木立

五月晴行列を待つ加茂の土手

大島を曳かば動かむ海おぼる伊豆高原

老鶯や山肌を翔ぶ赤いリフト

遠富士やつつじ炎の飛び火して

白鷺の磯に佇みてなに想ふ

遠縁に名をなせしひと額紫陽花

新緑のあはひに今やこれはさう

人住めば街の形につつじ咲く

何となく後ろめたくて母の日は

羽抜鶏金網にある表裏

退屈な木洩れ日動く蛇毎

雨傘を細く立て掛け業平忌

名を持たぬ沢の水音初螢

薔薇垣やパンの窯開く鐘の音

風五月目を閉ぢながらカプチーノ

坪畑の土のふくらむ穀雨かな

ウルマンの詩万緑の光かな

万緑を泳ぎ出したり染まりたり

地球這ふ蟻の行列明日は晴

青葉木菟ふと父の事母の事

父の忌の筭づくし副は酒

老鶯や鐘は静かに叩かねば

風薫る江の電に乗る五感かな

音たてて孟宗竹は皮を脱ぐ

老いらくの恋からす瓜の花咲かす

寺立夏ちりひとつなき渡り廊

夏に入るなむなむなむの旅支度

夏に入る昭和の品の整理時

夏来るうれひをいだく片便り

行く春やケトル気たるき笛鳴らす

木場の子の角乗り遊び夏立てり

梅を干すうめぼしいろの口すばめ

菖蒲湯に百数へたる子の匂ふ

布川 孝子

松 戸 岡山 敦子

習志野 上野 紫泉

千 葉 伊藤 希眸

直江 裕子

高野 春子

船 橋 元橋 孝之

金子 正道

夏雲雀連れ渡りする裏小道

東京 丹羽 武正

黙々と桜葉踏む杖の人

パレード行く新樹の街を颯爽と

句会待つ上野界隈夏木立

瞑想に耽ける鶉のゐて吾も居て

十葉のうつり香指にカツツ酒

丸の内白シャツの波大うねり

濃あぢさゐ女ときどきふりかへる

風に聞く野に山に唄田水張る

たけのこの極太三頭届きたり

子はLINE庭にどくだみ群れてをり

十三回忌ついて離れぬ夏の蝶

さくらんぼ朝の目覚めは鳥語かな

ランドセル駆け抜けてゆく笹若葉

橘や鳥語盛んに立夏かな

砂浜に遠き日想ふ潮干狩り

束の間の弾ける会話燕の子

緑陰の八十路の君と意を合はす

若葉風肩の力のすつと抜け

感性の違ひ右脳に七変化

一甍の牛の角突土灼ける

高山寺絵巻は紙魚に文字点

神田美千留

中村 三郎

中西 明子

高島正比古

岸上 道也

満腹の母娘を載せる青葉風

くまもんのペアルックやさくらんぼ

母の日やカナダの娘より花の束

法被着て神田にデビユー夏祭り

夏祭り御輿通りは青信号

夏空へぶらさがりゐる観覧車

さみだるる家族と呼ぶも小鳥二羽

剥落の仁王の脛も梅雨湿り

かけまくも旅路にくぐる茅の輪かな

癖髪を母系となせり花南瓜

緑陰や長いながあい木の時間

墨痕のきはだつ余白夏料理

白菖蒲無念のいろでありにけり

老鶯や天城山見えゐて遠し

湿原にわたすぎ充ちて夏に入る

更衣ふとときめきに似たるもの

湖の色すでに群青夏きたる

わが想ひすべて言ひたし夏に入る

号令に遅れる園児緑さす

墓この道だけは譲らざる

お迎へは赤い日傘とおふひひも

山荘の空家ぼつぼつ著我群るる

高尾 寛美

河島 坦

中島悠美子

福島 照子

児玉 有希

カタクリの小さく揺れて八海山

秋山甲武信

田植糸まへ棚田千枚欠伸する

思ひ出し笑ひか羅漢眼に春思

花うつぎ海馬の記憶は劣化する

薫風や縄手は人を歩ませる

古稀なんぞ洩垂れ小僧どぜう汁

柏餅生家跡形なかりけり

この家にも娘生れにし桐の花

尾池 喜代

桐の花高きに咲きて商家なりし

窓若葉句を案じある仕種らし

やさしさの孫の土産や蓮の実菓子

母の日やいまとなつては聞けぬこと

緑蔭や話の盡きぬ友と逢ふ

緑蔭やがらくた市にしがみ込み

真白な紫陽花隣家の庭の中

高井れい子

夏つばき白き心で天仰ぐ

坪庭に海の装ひ水遊び

グランドに掛け声ひびく万緑に

川崎 野村 冬魚

雷やまだまだ遠し母を待つ

父の研ぐ刃さきの光胡瓜もみ

猫一匹ぶらりと五月闇の中

鈴木 眞貴

道端に蟻とすみれの列がある

幼児のブリキの金魚水遊び

紫のつつし満開猫五匹

朝暑し空気に向かひ犬吠ゆる

旅へ出る母に真つ赤なばらが開く

部屋中に苺の香するジャム造り

直線の己が未来図青あらし

パナマ帽粹にかぶりし紳士かな

強面に乾くジーパン夏に入る

内海は風ぐやヨツトの舟溜り

「ありがとう」すらりと言へず聖五月

友は喜寿白の華やぐ花木

蚊遣香のののの灰やこぼれ雨

新緑や齡忘れて長散歩

青年の風鈴の風興す郷

病床で旅の友恋ふみどりの日

青 梅 金子 野生

アルバムに娘二人の水遊び

旧商家禮賦と大書せる屏風

釣り竿を置きしばらくの水遊び

雨上がり青柿の青いや増して